

# 鷺内遺跡 現地説明会

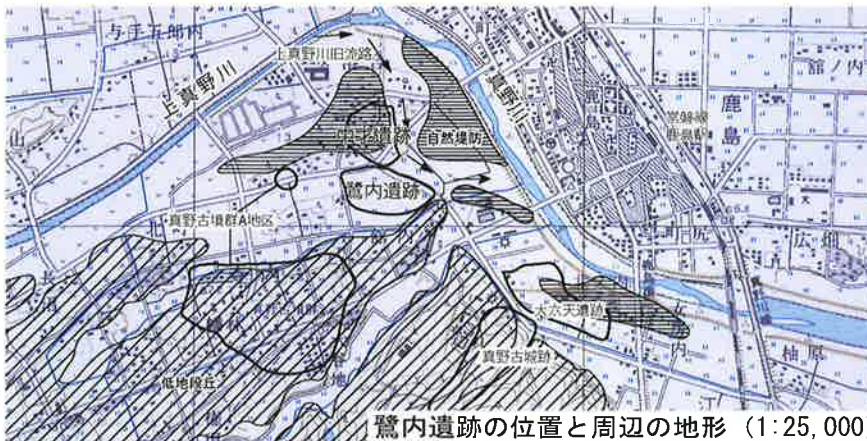
—平安時代の官衙関連遺構と縄文時代晩期の低地性貯蔵穴の調査—



上空から見た鷺内遺跡



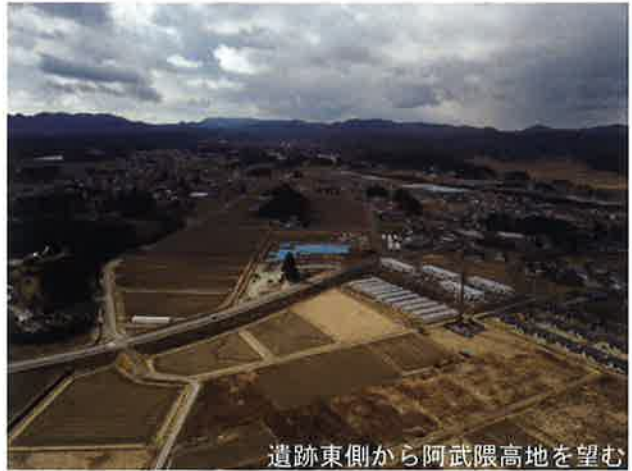
古代行方郡の郷と鷺内遺跡の位置



鷺内遺跡の位置と周辺の地形 (1:25,000)



遺跡西側から太平洋を望む



遺跡東側から阿武隈高地を望む

とき：平成 30 年 3 月 18 日（日） ところ：南相馬市鹿島区寺内字鷺内

南相馬市教育委員会

# 調査の概要

鷺内遺跡は、真野川とその支流・上真野川との合流点付近（標高約 10m）に立地します。周辺には、古代行方郡真野郷の重要遺跡が集中しており、その中心地であったと考えられます。

このたび 特別支援学校 の建設に先立ち、平成 29 年 10 月から 6,500 m<sup>2</sup>を発掘調査してきました。その結果、縄文時代晩期（約 3,000 年前）の低地性貯蔵穴群と奈良・平安時代（約 1,200 ～ 1,100 年前）の官衙関連遺構が発見されました。いずれも地域の歴史を知るうえで、きわめて重要な遺構といえます。

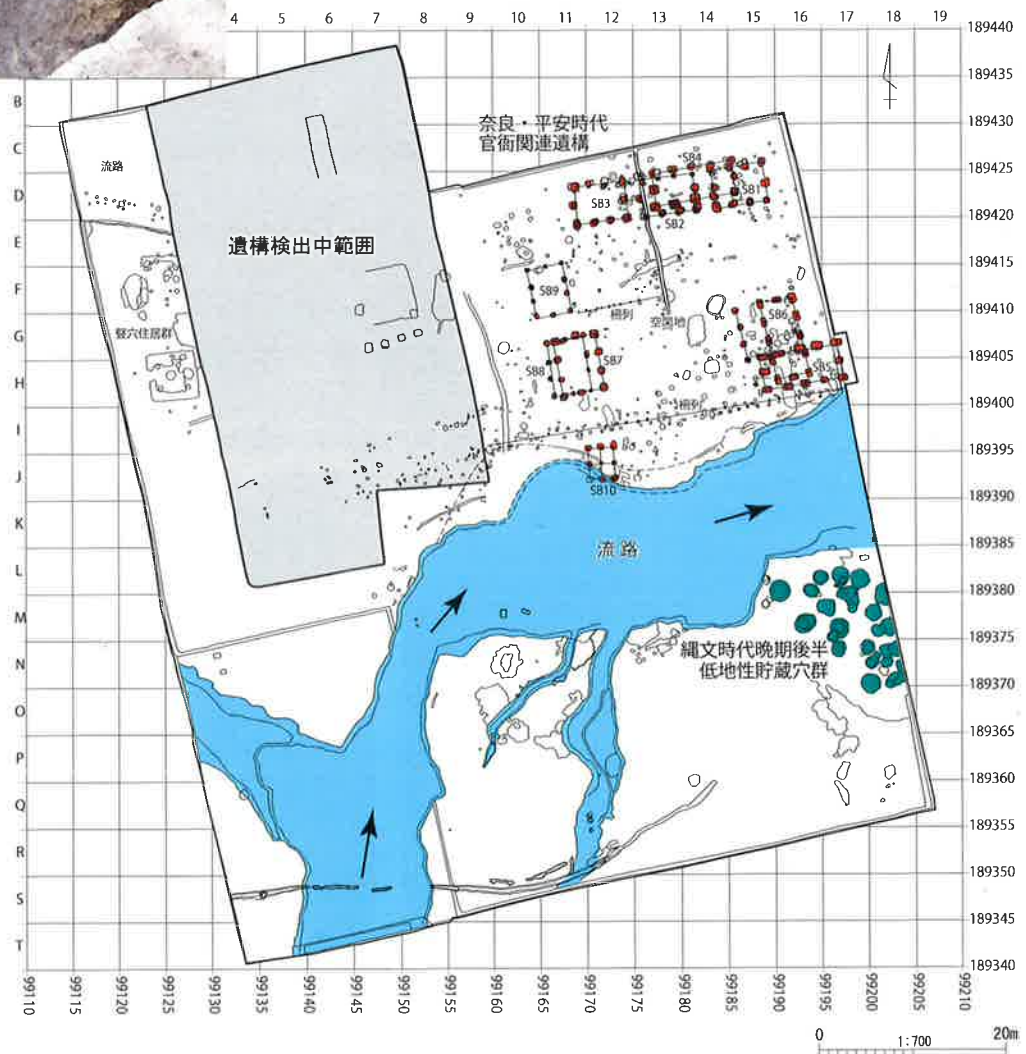
また、調査区の中央を横断するように流路の跡が見つかりました。これは縄文時代晩期にはすでに存在し、平安時代まで存続したと考えられます。ただし、堆積物の観察からは常に水が流れていたわけではなく、湿地のような環境にあった流速と考えられます。また、古墳時代後期（6～7世紀ころ）に発生した土石流により、流路が大きく埋まったことも明らかになりました。このことは、その土地で発生した災害の履歴を示しており、今後の防災・減災対策を考える上で重要な情報といえます。



泥炭（6世紀後半～7世紀前半 / <sup>14</sup>C）

古墳時代後期の構築材（6世紀後半～7世紀前半 / <sup>14</sup>C）

泥炭（6世紀後半～7世紀前半 / <sup>14</sup>C）



# 平安時代の官衙関連遺構

平安時代の官衙（役所）関連遺構を流路の左岸（北側）で発見しました。出土遺物の年代から、8世紀～9世紀ころ（約1,200～1,100年前ころ）に営まれたと見られます。

最も特徴的なことは、掘立柱建物がほぼ同じ向き（10度前後西偏）にそろえて建てられおり、「コ」の字に整然と配置されていることです。その中央には作業場や広場のような性格をもつ空閑地、南面には流路（水辺）との境界を示す柵列が設置されています。これらのことから、遺構群が計画的に築かれたことがわかります。発見した10棟の掘立柱建物のうち、2間（総長約3.5～4m）×3間（総長約5.5～6m）の側柱建物が6棟を占めることも特徴的です。しかも、同規模で規格性が高い建物が、同じ場所で建て替えられた様子もわかりました。このことから、一定期間、同じ機能が継承された建物であると考えられ、官衙的な性格を読み取ることができます。

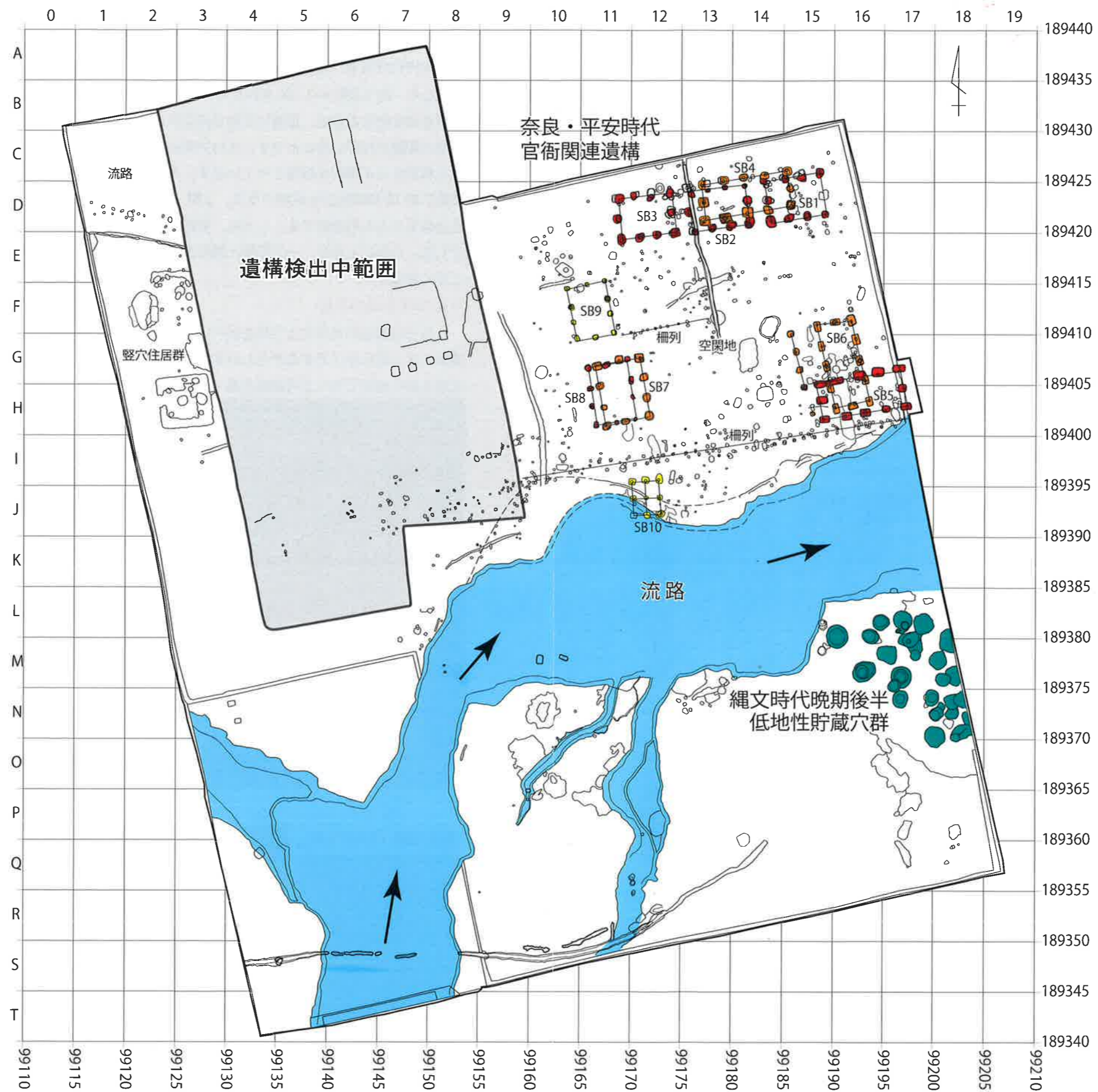
## 官衙関連遺構の性格

これらの遺構の具体的な性格を裏付ける文字資料は認められませんが、墨書土器が出土しており、今後の調査・整理により明らかにできるかもしれません。現段階では、建物の構造と構成から、何らかの物資を集積・管理するための施設であった可能性が高く、地域の拠点的な建物群であったと考えられます。

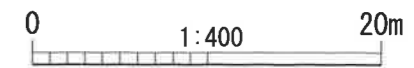


墨書土器（赤外線写真）





調査区全体図



## 掘立柱建物の調査



掘立柱建物は、地面に穴を掘り、柱を立てた建物です。建物の部材が残る事例は珍しく、発掘調査では、主に柱を立てた穴が見つかります。中央の写真は、柱より大きな四角い穴（柱穴）を掘り、穴の中に柱を立て、穴を土で埋戻して、柱の根元を固めた様子を示しています。柱そのものは腐って残っていませんが、柱があった部分に周囲とは異なる別の黒い土が埋まっていることがわかります。ちょうど左の図面のような状況にあったと考えられます。右の写真では、柱穴の中の柱を立てる位置に石をすえています。左の図面の「礎盤」の代わりに、「栗石」と呼ばれる石をすえた構造で、柱の不同沈下を防ぐための工夫です。

## 官衙関連遺構が築かれた背景



鷺内遺跡は、上真野川と真野川との合流点付近に立地します。このことは舟運が発達していた当時、物資を集積する上で有利な条件にあったといえます。一方、これより上流に舟運に適した水深が常時あったとは考えにくく、勾配が急であることも踏まえれば、上流域に向かう舟運の利用は効率的ではありません。このような条件を踏まえると、鷺内遺跡周辺で水上交通から陸上交通へ接続したことを想定できます。物流拠点としての条件を備えていたからこそ、物資の集積に関連する官衙関連遺構が設置されたのでしょう。

# 縄文時代晩期の低地性貯蔵穴

縄文時代晩期後半（約 3,000 年前）の低地性貯蔵穴 30 基を流路の右岸（南側）で発見しました。貯蔵穴とは、木の実（クルミ・トチノミ・ドングリ）を保管するために掘られた穴です。

## 水を利用した貯蔵穴

貯蔵穴の大きさは、大中小の 3 種類があります。大（直径 2m 前後）・中（直径 1.5m 前後）は、水が湧き出す 70～80 cm ほどの深さまで掘られており、地下水の利用が想定されます。水温・水量が安定する地下水に木の実を浸けることで、長期間の保管を可能としたようです。殺虫や灰汁抜きなどの効果も期待され、縄文人の知恵を垣間見ることができます。直径 1m 前後の小さなものは深さ 30 cm ほどで、水が湧き出す深さにまでは達していません。しかし、通常であれば腐ってなくなってしまう木の実が残っていることから、常に水の影響を受けるような環境にあったことがうかがわれます。貯蔵穴の周囲には、人々が歩いた痕も残っており、湿潤でぬかるんだ環境に貯蔵穴が掘られたようです。

縄文人は、炭水化物を木の実から摂取していたと考えられています。秋に採取した木の実を、年間をつうじて計画的に利用する必要があることから、適切に保管する必要がありました。鷺内遺跡で発見した貯蔵穴は、その管理のありかたを示す全国的に見ても貴重な発見といえます。



上空から見た貯蔵穴群

## 貯蔵穴の立地

上の写真でクレーター状に見える丸い穴が貯蔵穴です。流路に面した低い土地に、集中して掘られたことがわかります。湧水を得るのに適した環境であることから、ここで木の実を集中的に保管していたようです。また、特定の範囲に繰り返し穴が掘られたことから、貯蔵穴が重なり合っ

## 当時のすまい

貯蔵穴を残した人たちの住まいは、調査範囲からは見つかりません。かつて、鷺内稲荷南側の水路工事の際、建物の柱が発見されています。この柱の材質の選択性（クリ）や加工のあり方は、縄文時代晩期の状況とよく似ており、貯蔵穴と同じところに築かれた建物の可能性があります。住まいは、標高がより高く、水の影響を受けにくい南側に築かれたのでしょう。



水が湧き出す深さまで掘られた貯蔵穴



ぬかるんだ環境で踏み荒らした痕跡



重なり合っ

# 低地性貯蔵穴から出土した木の実

低地性貯蔵穴で保管された木の実は、クルミ・トチノミ・ドングリです。それぞれの遺構から特定の種類が出土しており、貯蔵穴の計画的な利用がうかがわれます。なお、ドングリの具体的な種類については今後詳しく調べますが、コナラ属と考えられます。遺構ごとでドングリの形に違いがあることから、いくつかの種類がありそうです。今後、それぞれの穴で保管された木の実の種類と量を算出し、縄文人の食生活の一端を明らかにしていく予定です。

## クルミとドングリの出土状況

クルミとドングリは、湧水のある穴の底から出土しており、保管に水を利用していたことがうかがえます。多くの場合は平らな底の全面から出土しましたが、クルミが長方形の範囲に規則的に並んでいるようなものもありました。出土状態からは、袋・かご・箱などに入れられていたと考えられますが、その部材は今のところ出土しておらず、これから詳細に調査する予定です。

## トチノミの出土状況

トチノミは、底から数10cm上の地層から多数出土しました。木の葉や枝を多く含む特徴的な地層から出土しており偶然に含まれた可能性もありますが、その数量は著しく多く、特定の種類であることから人為的に入れられたと考えられます。具体的な利用方法については、様々な分析を行いながら検討していく予定です。



何らかの容器に入っていたと推定されます。



穴の底から出土したドングリ



木の葉や枝と一緒に出土したトチノミ



## 木の実を加工する道具

貯蔵穴からは木の実だけでなく、それを加工する道具も出土しました。堅い殻を割る敲き石・凹み石、木の実をすり潰す磨り石・石皿があります。このことから、鷺内遺跡では木の実を保管しただけでなく、加工も行っていたといえます。